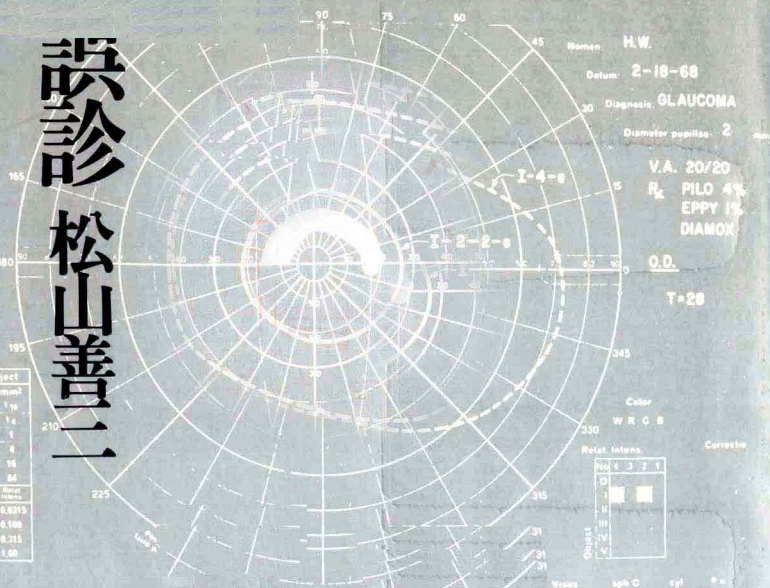


誤診

松山善三

Object	
No	mm ²
I	1
II	4
III	16
IV	64

No	Relative intensity
1	0.6215
2	0.180
3	0.315
4	1.00



Plots 1000 - 5, 8,
60000

潮出版社

誤 診

検印廃止

一二〇〇円

昭和五十四年 五月十五日 印刷

昭和五十四年 五月二十五日 初版

著 者 松 山 善 三

発行者 富 岡 勇 吉

発行所 株式会社 潮 出 版 社

東京都千代田区飯田橋三一一三

電話 東京(03) 231 0074 販売部

振替 東京 五一六一〇九〇 編集部

郵便番号 一〇〇二

(乱丁・落丁本は送料弊社負担でお取り替
えいたします)

印刷 第一印刷株式会社

製本 株式会社鈴木製本所

本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写複製(コピー)することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版社の権利の侵害となりますので、その場合には予め小社あて許諾を求めて下さい。

© 1979 Masuyama Printed in Japan

誤診／目次

第一章	7	眼底に黄白色の隆起。浩太郎は息を呑んだ。不安が確信になった。「グリオーマだ」
第二章	19	教授は静かだが、重い口調で言った。「長谷君、手術は誤りだった、誤診だった」
第三章	31	おめめが一つしかないからお姉ちゃんの顔が半分しか見えないって笑いますのよ。
第四章	49	あなたは、ヨーロッパ旅行の最後の日、ウェストミンスター寺院の前で会うでしょう。
第五章	62	戦死した父がビルマ戦線で、あれと同じような残虐行為を行ったのではないか。
第六章	78	ベルリンでの生活は嘘で固まっていた。嘘をつかなければ一日も生きてゆけなかった。
第七章	96	私は言ってやりました。「戦争は人間と人間がやったんだ。お前も俺もないって」
第八章	108	少女にとって、憎悪の感情だけが未来の原動力になり得るという意見は賛成です。
第九章	121	薄闇の中に差し出された白いスエードの小さな手を、浩太郎は軽く握り返した。
第十章	133	死んだ……？ そんなはずは……死んだ人間が僕をヨーロッパへ呼ぶわけがない。

第十一章	146
第十二章	160
第十三章	173
第十四章	185
第十五章	203
第十六章	212
第十七章	218
第十八章	223
第十九章	228
第二十章	232

君は知っているかい？ 春になると、ドナウ河で起こる自然の不可思議な祭典を。

私は告げたのです。眼球摘出手術はあなたさまの誤診の結果であることを。

亭主が死んだという地中海を見てきたい。海を見よう。新しい苦しみを探そう。

父が銃殺刑の判決を下した。そして、シボンの流れに、あなたのお父さまは消えた。

「ワタシノオメメ マタハエテクルネ」小さな掌が、見えない空をまさぐっていた。

僕は、あなたや、あなたのお父さんの前に手をつけて謝まらなければならぬ。

お前がどう思っても、この男を裁判にかけてやる。法が、その罪を裁くだらう。

手術は正しい処置であった。それを疑うのなら、カルテを調べてみるがよい。

ケラケラと笑う紀久子、それが無心であればあるほど、敦子の心は針で突かれた。

君は、ヒューマニストの仮面をかぶった道化師だ——浩太郎は憤然と部長室を出た。

第二十一章	238	少女のカルテが紛失していなかったら、貴様は谷圭子を思い出さなかったろう。
第二十二章	245	圭子にとって、この埠頭は、傷だらけになって戻った最初の日本であった。
第二十三章	251	あなたさまも浩太郎さまを心ひそかに愛していらっしやると、確信しています。
第二十四章	258	君は自分の良心に忠実なあまり人を傷つける。まっすぐな道だけが道ではない。
第二十五章	264	肉体は滅びても心は残るなどという奴がいる。みんなまやかした。嘘をつけ。
第二十六章	270	俺が人を愛そうとしなかったのは、俺の前に人間らしい人間がいなかったからだ。
第二十七章	276	角膜移植を行えば見えるようになると言われた。手術はあなたがしてください。
第二十八章	283	紀久子の人生を、たとえそれが医学の進歩であろうとも犠牲にしてはならない。
第二十九章	289	裁判に勝って、二人の眼玉をえぐり取ってやる。その為に、谷圭子に会わねば。
第三十章	295	僕は、僕のすべてをかけて、この開眼手術をやりとげてみたいのです。

第三十一章	302	アイ・バンクに完全な角膜がなかったら、私の眼を使うと約束して下さい。
第三十二章	308	大義名分だの、人間の責任だのとぬかすけれど、そんなものがなにになる？
第三十三章	315	男も女も愛に責任はないかも知れない。でも人間の心は、もっと優しいものよ。
第三十四章	321	遅くとも明後日、手術をしなければ紀久子の眼は、音をたててはじけるだろう。
第三十五章	328	運命への挑戦。おのれの眼球を自分の意志で摘出し、紀久子を開眼させるのだ。
第三十六章	335	浩太郎の透명한角膜は切り取られ紀久子の眼の中に滑り落ちる。縫合が始まる。
終章	342	浩太郎は地方検察庁へ出頭しなければならない。そこからすべては、始まるのだ。

あとがき

装幀 亀海昌次
写真 大沢秀行

誤

診

第一章

「どうしましたか？」

と充血した子供の眼^{まぶた}から、その子を膝に抱いた若い女の顔へ視線を移した時、浩太郎はどきりとして思わず顔を赤らめた。その人は、毎朝浩太郎が病院ゆきのバスに乗りこむ時、何人かの降車客に混じって、きまって最後に下車してくる女子学生の美しい横顔に、よく似ていた。浩太郎はまるで中学生のような淡い感情をその少女に抱いていた。名も知らぬその少女に会う期待から、浩太郎の日課はじまっていた。

面長な顔、内巻きにカールされた髪型、眼も眉も優しく、肩も胸も薄い少女だが、バスのステップを飛び降りる時の敏捷な身のこなしは、ちらりと野性の逞しさを見せて、毎朝浩太郎の若い眼を楽しませてくれた。

その少女が、いま子供を抱いて浩太郎の前に腰かけている。そう錯覚して浩太郎は一瞬顔を赤らめたのである。人違いであった。

「ものもらいだと思うのですけど」

と、子供の顔を覗きこむようにして、その若い女は言った。浩太郎は平常な医局員にもどった。

「いつからですか」

「ゆうべから、とても痒^{かゆ}がって、……寝ている間に掻きむしったらいいんです。今朝起きたら、もうこんなに腫^はれて……」

「おいくつですか」

「三つです」

「以前に眼の病気をしたことがありますか？」

「いいえ」

「あなたはどうです。お母さんは？」

返事がない。浩太郎がカルテから眼を上げた。女はそれが癖なのか、白い前歯で下唇を噛んで小さく微笑んでいた。

「私、この子のお母さんじゃありません。姉です」

「そうですか、それは失礼」

「私、この子とあんまり年が離れているものですから、どこへ行っても母親と間違えられるんです。母は一昨年亡くなりました」

言われてみれば若過ぎる。診察室との境のカーテンを押し上げて、婦長の谷圭子が顔を覗かせた。

「長谷先生、あと何人ですか？ 三宅教授は一時から教授会なんですけれど……」

「これで終わりです」

浩太郎はカルテを手にして椅子を立った。正午までとい

う診療時間はどうに過ぎて、診察室の電気時計は一時十分前を指していた。時計の下横長のテーブルに五台の赤外線照射器が並んでいる。洗滌や薬液の点眼を済ませた患者たちが、看護婦の指示に従って、同じ表情を見せて照射器にかがみこんでいる。ドウナツ眼帯をかけた中年の紳士が、三宅教授の前から一礼して立ち上がった。

「やあ」

と、うなずいた教授は中腰のまますばやくカルテに横文字を書き入れ、そのペンを投げた。浩太郎が入ってきた。

「長谷君、あとは君、診てくれ給え」

三宅教授は浩太郎が差し出したカルテを横目で睨んで席をあけた。

「ホルデオルンだと思えますけれど、三歳の子供です」

「うむ。君頼むよ、教授会があるんだ」

「はい」

三宅教授が出て行った。

「野々宮さん、どうぞ」

と、谷婦長が膿盆を手にして、先刻の女と子供を診察室へ呼び入れた。野々宮と呼ばれた女は、子供を抱いて浩太郎の前の丸椅子に腰をおろした。

「もう少し前へ出て下さい。先生の膝とあなたの膝をべ、ド代わりして、子供さんの顔を先生の方へ向けて下さい。暴れたら足を押さえて下さいね」

婦長は、子供の足を自分で押さえてみせた。浩太郎が子

供の頭を抱いて、自分の膝の上に仰向けた時、子供は引きつたように身ぶるいして大きな泣き声を上げた。そして小さな足を激しくバタつかせた。浩太郎は突き上げてくる子供の手を婦長の手に渡すと、すばやくプロタゴールを点眼し、食塩水で浮腫した子供の眼を洗滌した。そして眼瞼を反転して見た。結膜下に豆粒大の結節が見える。

「ものもらいですね。やっぱり」

浩太郎がオーレオマイシンをガラス棒に受けた時、三歳の子供とは思えないほどの強い力で、子供は抱かれていた女の胸を蹴り上げた。女は「あッ」と小さく叫んで丸椅子から転がり落ちた。受け止められた婦長の腕の中で、子供はこの世の終わりとでもいうような叫び声を上げて泣きわめいた。なるほど、女は子供の母親ではなかった。女はうろたえ、婦長の手から子供を抱き取ると「紀久子ちゃん、紀久子ちゃん」と強い声を出した。頬が桜色に染まっている。「少し待ちましょう。泣きやむまで」

谷婦長はそう言って、浩太郎へ笑ってみせた。その笑いは若くて未熟な医師への嘲笑いではなく、腕白な弟の失敗を笑うような優しい笑いであった。浩太郎は学生時代からインタン、そして三宅眼科教室に残ったこの四年間、婦長の谷圭子から有形無形の好意を受けてきた。

谷圭子は浩太郎がこの医科大学に入学した頃、すでに三宅眼科の看護婦として、この診察室に勤務していた。大学を卒業した浩太郎が三宅教授の許しを得て医局に残る決意

子供の眼がそれを追った。
「弱虫だなあ、紀久子ちゃん……。なんにも痛いことしないでしょう」

再びガラス棒を取り上げた浩太郎は、脱脂綿で子供の涙を拭き取った。子供の眼が浩太郎を見つめた。浩太郎は「おやつ？」と思って手を引いた。子供の瞳孔の奥にキラリと光るものを見たからである。

「待てよ」と呟きながら、浩太郎は再び身を乗り出して子供の瞳孔を覗きこんだ。子供の顔がニッと笑った。「ばあつ」と浩太郎がおどけてみせた。しかし浩太郎の眼は一点に集中していた。子供が大きく眼を見開いてみせた。

「ちょっと暗室へ行ってみましょう。気になることがあるから」

浩太郎はミドリリンを点眼すると、女をうながして立ち上がった。

「子供だから、顕微鏡は無理じゃありませんか？」
と、圭子が聞いた。

「開險器をかけて診よう。暴れても、泣いてもしょうがない」

浩太郎の声に、意外に強い響きがあった。圭子は、開險器と双眼ルーベを手にして暗室の幕を引いた。三坪ほどの小さな暗室に、細隙燈顕微鏡が二台並んでいる。眼検査に革命的な新時代をもたらしたこの優れた顕微鏡によれば、生体のまま眼底はもちろん、毛細管、細胞、神経までも見

を固めた時、真先に喜び、その決意に力を与えてくれたのは圭子であった。もちろん三宅教授に対する浩太郎の敬慕の念も深かった。ほとんど無給に近い医局員の生活を大学を卒業した後にも続けてゆくことは、親一人子一人の浩太郎にとって、けっして容易な道ではなかった。姉のような圭子の好意がしばしば浩太郎を勇気づけてくれた。浩太郎の課題である弱視研究のデーター作成や、整理にも圭子の援助が必要であった。二人の間にはいつしか医師と看護婦というより深い友情のようなものが生まれていた。この半年くらいの間、やっと浩太郎は実際診療を許された。いつても患者のすべてを許されたわけではない。ごく簡単な治療と診断を、一日に三、四例許されるに過ぎない。まだ医師の卵である。浩太郎がハンドランプを手にして、患者の眼球を覗きこむ時、圭子はきまって浩太郎の側近くに立って、その一挙手一投足を見つめていた。それはまるで、はじめておのれの力で歩む嬰兒を見つめる母親の期待に満ちた眼であり、自信をもってやりなさいという励ましの眼でもあった。患者の扱いや、咄嗟の処理では医師の浩太郎より、長い間の経験と習練を生かした圭子の処理の方が、はるかに適切な場合が多かった。まして幼児の診察にはいつも手を焼いた。机の引出しにキャラメルを用意しておくようになったのも圭子の発案であった。

子供はまだ泣きじゃくっていた。浩太郎が机の引出しからキャラメルを出し、圭子がそれを手に掲げた。うるんだ

透すことができる。しかし幼児をこの器械の前に固定することはほとんど不可能である。あえて顕微鏡検査をするすれば、全身麻酔でもかけて行方より他に方法はない。

浩太郎は、眼底倒像ルーペによる方法で子供の瞳孔を見ようとした。二人の看護婦を呼んで子供の手足を固定させた。子供を抱いた若い女は、蒼ざめた顔で「紀久子ちゃん、紀久子ちゃん」とうわづった声で子供の名を呼び続けた。子供が悲鳴を上げた。圭子が子供の眼に開瞼器をかけ上下に引き開けた。子供は顔を左右に振った。眼底倒像ルーペを手にした浩太郎が片方の手で子供の顔をぐいとひねって、その瞳孔を覗きこんだ。

「右へ、もう少し右へ」と、浩太郎は瞳孔を診続けながら、光源を左右する圭子へ呼びかけた。

前眼部には変化がない。瞳孔の大きさも正常、対光反応もあるようだ。しかし眼底に黄白色の隆起が見える。浩太郎は息を呑んだ。不安が確信になった。脈絡膜側に向かって腫瘍が走り、その上に網膜血管が明瞭に見える。「グリオーマだ」浩太郎は興奮した。かつて教場の一角で、この恐ろしい眼病の講義を三宅教授から仔細に教えられたことがある。学術書でも読んだ。ノットを取り、その下へ赤線を引いたこともある。だが、浩太郎は今日始めて生きた素材にぶつかった。いや自分の眼が、それを発見した。浩太郎の興奮と緊張は、次第にこみ上げてくる喜びに変わっていった。これが医師の喜びというものだろうか。浩太郎

は自問した。この医局に医師として勤務してから四年、浩太郎は何十人、何百人何千人という患者に接してきた。眼球を摘出するというような大きな手術にも立ち合い、その助手をつとめたこともあった。あやうく失明をのがれた患者が教授の胸にすがって泣いて喜ぶ姿も見た。退院間際の少女が「先生、見えるわよ、見えるわよ」と終日飽かずにハンカチを振っていた姿も、何年かの医師生活の思い出の一つとして残っている。しかし、今日この瞬間まで、浩太郎は医師としての喜びと誇りに触れたことはなかった。少なくとも自分はそう思っていた。

子供の眼底に白く光る短刀のような腫瘍を発見した時、浩太郎の心は躍り、激しく脈打ち、あふれるような感動と鋭利な快感を味わった。医師の喜びは、病原の克服ではなく、その発見にあることを、浩太郎はその日、はじめて知った。

「どうなんでしょうか？」

と、子供を抱きなおした女が、食い入るような眼で浩太郎を見た。

「まだ、はっきり申し上げられませんが、ひょっとすると、悪い病気があるかも知れません」

「悪い病気と申しますと？」

「三宅教授に診断していただきます。僕にはそれを言う自信がありません」

「そんなに悪い病気ですか？」

「もしそうだとすればね。このままちょっと待っていて下さい。僕、教授のところへ行ってきます」

浩太郎は暗室を出た。二階への階段を駆け上がった。長い廊下を走るようにして会議室のドアを叩いた。円卓を囲んでいた二十人ほどの教授の顔がいっせいに浩太郎を見た。浩太郎は三宅教授の姿を求めた。

「どうしたんだ」と三宅教授が立ってきて廊下へ出た。

「先生、さっきの子供ですけど、グリオーマじゃないかと思うんです」

「なに!？」と教授の顔が不機嫌に浩太郎を見た。浩太郎は荒い息を吐いた。

「会議中だと思ったんですけど、僕には診断を下す自信がありませんし、明日は日曜なので、できれば先生に診ていただいて御指示を受けたいと思ひまして」

「そうか、よし、すぐに行く」

三宅教授はいったん会議室に戻ると、すぐに顔を出した。

「子供だと言ったね?」

「はい」

「いくつだ」

「三つです」

「三つか……。顕微鏡検査は無理だな」

教授と浩太郎は暗室へ急いだ。浩太郎が暗幕を引いて教授を迎え入れた時、子供は反射的に大きな泣き声を上げて若い女の胸の中でもがいた。再び同じ操作が繰り返され、

子供は割れるような叫び声を上げた。

双眼ルーペをかけた三宅教授が、じつと子供の瞳孔を覗きこんでいる。教授の横顔を見つめる浩太郎の顔には、自信と期待が色濃く浮き出している。泣き疲れた子供がぐったりと緊張を解いた。三宅教授のルーペは、なおも執拗に子供の眼底を追っている。子供の胸が大きく伸縮した。子供はくくと噎せ、その口から牛乳色の汚物を吐き出した。三宅教授がやっと身を起こした。そして静かにルーペを取りはずした。浩太郎は、まるで自分が患者でもあるかのように、不安な思いで教授の宣告を待った。

「グリオーマだな。確かに」

「やっぱり、そうですか」

「よく見つけたよ。早く発見できてよかった。手術しなくちゃならないが、そのことを君からよく話してくれ」

「僕が、ですか?」

「こういう病気をどういうふうに話すか、それも勉強の一つだよ。私は教授会に戻るからね」

双眼ルーペを圭子の手に渡すと、三宅教授は静かに暗室を出て行った。子供はもう抵抗する力もなく若い女の胸に顔を埋めていた。

「診察室にお戻りになって下さい。先生がお話なさるそうです」

暗幕を左右に開いた圭子が、女に呼びかけた。異様な空気が事の重大さを女に知らせた。女は祈るような眼で浩太

郎の前に腰をおろした。浩太郎は言った。

「子供さんの病氣は網膜神経膠腫もうまくしんけいこうしゅといって非常に悪質な病氣です。いつてみれば癌がんのようなものです」

「……」

「不幸にして子供だけに発見される病氣ですが、どうしてこういう腫瘍が子供だけにできるのか、原因はまだ分っていません。分っていることは、このまま放っておくと腫瘍が眼球の全部を犯し、さらに転移して、脳に侵入することがあるということです」

「先ほど、癌のようなものだとおっしゃいましたけれど……」

「ええ。それは手術以外に、子供さんを救う道はないということです」

「手術といいますが……」

「眼球摘出です。悪い方の眼を取ってしまうのです」

「そこまで、浩太郎はすらすらと言った。あえて事務的な物言いをした。

女の顔はみるみる蒼ざめ、女は子供を抱きしめたままうつむいた。沈黙のまま、ある時間が過ぎた。しかし女は顔を上げようとはしない。その姿は必死に、なにかに耐えているようであった。

「手術は一日も早くしなければならぬでしょう。一日遅ければ、それだけ危険が近づいてくるのです」

浩太郎は決意をうながすように言った。女がやっと顔を

上げた。浩太郎は眼を瞠みった。女の両眼には一杯の涙が光っていた。

「可哀想な紀久子ちゃん……。先生、他に方法はないのでしょうか。この子は女の子です。眼を取ってしまうなんて……。私だったら死んでしまします」

「眼球を摘出しなければ、やってくるのは死です」

浩太郎は冷たく言い放った。圭子が驚いて浩太郎を見た。医師にあるまじき若い言葉である。

「待って下さい」と、女は抱いた子供を守るようにして身をよじった。

「父に相談してみます。手術が必要だということは分りました。一日も早くそれをしてなければならぬということも分ります。でも、私にはそれを決定する勇氣がありません。一度帰って、父に相談してみます」

「それがいいですわね」

圭子が慰めるように言った。

「あまり突然のことですものね。びっくりなさったでしょう。とにかくお家へお帰りになって。明日は日曜日ですから、ゆっくりご相談して」

「月曜日の十時に、まず小児科の方へ行って下さい。全身麻酔をかけて手術するから、そこで一般的な診察をしてもらいます。手術は十一時から」

浩太郎は最後の断を下すように言った。そして、野々宮紀久子、三歳と書かれたカルテの余白に、大きな字で「緊

急・手術」という横文字を書き入れた。

女が一礼して立ち上がった。

風は強いが空は美しく晴れ渡っていた。

野々宮敦子は大学病院前の停留所に立って電車の来るのを待っていた。敦子と紀久子の他には人影はなかった。停留所の向こうの材木商の前に、真新しい角材を山積みにした一台のトラックが止まっている。角材の木肌が、まるで裸体を見るような肉感的な色艶を見せている。敦子はふと手術台の上に寝かされた紀久子の裸体を思い浮かべ、その前にメスを持って立つ浩太郎の姿を思った。「可哀想な紀久子……」という思いが、再び敦子の胸をしめつけた。

電車が来た。車内は空いていた。四、五人の客が隅にかたまって腰かけている。敦子は紀久子を抱いて、広い座席の真中にボンと座った。

「アツコネエチャン、チンドンヤ、チンドンヤ」

と、窓にしがみついた紀久子が高い声を上げて敦子の手を払いのけた。敦子は振り返って窓外を見た。白粉を真白に塗った三人の異様な顔が敦子の視界を流れていった。それはサイレント映画を見るように、敦子の視野の外に消えていった。敦子は、紀久子の運命について考えていた。

手術。そして眼球摘出。まだ三歳の紀久子には、それが自分の将来をどのように決定し、どのように運命づけるものなのか、何一つ分っていない。手術という言葉の持つ重

さや不安さえも知らないだろう。もし自分がこんな病気で眼を失わなければならぬとしたら、いったい自分はどうするだろう。「私だったら死んでしまいます」と口走った先刻の言葉は、なんの解決にもならないのだ。おのれの無力さを知らされるだけだ。敦子は、無心に窓外を見つめる紀久子の瞳を、恐る恐る覗いて見た。誰が見ても、単なるものもらいだ。腕白な子供たちによく見かける病氣だ。その底に癌のような恐ろしい病巣がひそんでいるとは思えないほど、その黒い瞳は、はっきりと視点をとらえて動いている。

屏風ヶ浦の停留所で敦子は電車を降りた。埃と砂とを混じえた強い風が、海の方から吹き上げてくる。二年ほど前からはじめられた干拓事業は、その八分通りが完成し、かつて美しい海だったその場所には、赤土と塵埃が、小高い山を作っている。歴史は醜い。敦子はそう思った。まだ自分たちが小学生の頃、この海辺には松の木が生え、小舟が浮かべられ、砂浜には美しい色豊かな貝殻がいくつも転がっていた。夏季には臨海学校の海水浴場となり、冬季には一面に張りめぐらされた簀に、漆黒の海草が、漁師たちのひび割れた手を待っていた。敦子は当時の風景を思ってみた。干拓で造成された土地肌には、荒廃と死の黒い陰が見えた。不気味で醜悪であった。敦子は遠い紀久子の未来を思った。紀久子は敦子の背で意味の分らぬ歌謡曲の一節を口ずさんでいた。

山の崖下に敦子の家はあった。百二十機に及ぶB29の来襲を受けて、横浜市が一瞬にして焼野原となった時、この磯子区の一画だけは幸運にして焼け残った。山と海の境にあって、爆撃をまぬがれたという人もあるが、このあたりは戦前、ささやかな漁村であって爆撃する価値もなかったようだ。古びた家々の路地をぬけて、敦子が生垣の庭木戸を押した時、父は庭に立って落葉を燃やしていた。庭木の手入れでもしたのだろうか、葉くずが散乱し、数本の樗の幹に葉束が巻きつけられている。

「敦子かい？」

と、父が顔をめぐらせた。

「ただいま」

敦子は、背中の紀久子をそこに降ろすと、落葉の山をはさんで、父と顔を見合わせた。

「どうした？」

「……」

「ものもらいだらう？ やっぱり」

父は、縁先を駆け上る紀久子の後ろ姿を見ながら笑った。敦子は父を見つめた。病名を告げ、その処理をどう喋ったらしいのか、敦子には見当がつかなかった。迷った。しかし言わなければならない。たとえ父がどのように悲しもうと。「どうしたんだ敦子、なにかあったのか」と父は再び言った。敦子は息を飲んだ。そして思いきって吐き出した。

「お父さん、紀久子の眼は、手術しなくちゃいけないんで

すって」

「手術？」

「それも簡単な手術じゃありません。紀久子の眼は網膜神経膠腫という恐ろしい病気なんですって……」

「まさか、失明するようなことはないんだらうな」

「……」

「どうなんだ」

「お父さん、紀久子の眼は、もう駄目なんです」

「駄目って……、どう駄目なんだ」

「手術して取ってしまわなければ」

「なに、眼を取る？ 両眼か？」

「いいえ、悪い方の眼だけです。でも、それ以外に方法はないと、お医者さんは言うんです」

「……」

「摘出しなければ、その病気はどんどん悪くなって、しまいは脳に移って死ぬと言うんです」

「……」

「手術は一日も早くしなければならぬそうですが、私はお父さんに相談してからと言って帰ってきました。どうしましょう」

「どうするって……、お前」

父は絶句した。

敦子は逡巡した。病院の診察室を出てから、ここまでの間、考えては打ち消し、打ち消しては考え続けてきた一つ